

三十光年の星たち展

一問一答

宮本輝氏に「三十光年の星たち」にまつわる背景やエピソードなど、ミュージアムからの質問にお答えいただきました。

作品名を「三十光年の星たち」に決められた経緯を教えてください。

30歳のときに太宰治賞（「泥の河」で受賞）を受賞して、ある人に「こんな作家になりたい」「こんな仕事をしていきたい」という話をしました。するとその人は「君の決意をどうやって信じろ」というのか。30年後の姿を見せろ」と言いました。冷たく突き放されてショックを受けたと同時に、なにくそ見返してやるという気持ちにもなりました。けれども30年が近づくにつれ、あらゆる分野において一つの尺度は30年だなと分かるようになり、私の人生にあのような言葉を言ってくれる人がいたことに感謝しています。

作品の構想を考えているとき、第一に決まつた登場人物は佐伯老人です。そして彼と出逢って成長する人間を考えました。「これから30年後を考えられる人物としては30代半ばまでだな」と思い、そうして坪木仁志といふ人物が生まれました。

作品の軸となる「歳月がなければ作り上げられないもの」はなんだらうかと考えたとき、まず森が出てきました。「三十光年の星たち」という題がほぼ決まりかけていた頃に、京都の和久傳で食事をする機会があり、そこで女将に「和久傳の森」の話を聞いたんです。実際に現地にも行きました。

作品には、30年間何かにひたすら打ち込んできた人たちも出さなければならない。和久傳の女将の紹介での工房を訪れ、そこでさまざまな匠の人たちと出逢うことができました。それで、いよいよスタートです。

「三十光年の星たち」という題が思いつけば、僕の小説のほとんど半分はできたようなものなんですね。

本作品では、「志と佐伯が車で旅をします。

彼らが訪れる場所のなかで、

宮本さんの印象に残っているのはどこですか。

福知山から宮津へ行く道ですね。久美浜の森がある周辺は、海が見えて山もあります。宮津市は美しい町ですし、あの辺りいいですよ。

今回の企画展では、新聞連載で挿絵を
ご担当させていただいています。

宮本さんは赤井稚佳さんの原画を
展示させていただいています。

独特の稚氣があります。『B R I O』で「三千枚の金貨」を連載していたときも挿絵を担当していただいて、そこで女将に「和久傳の森」の話を聞いたんです。実際はカラーでしたが、赤井さんの絵ならモノクロでも

大丈夫じゃないかなと思いました。新聞連載をすることになり、声をおかけしたところ、二つ返事で「やります」とお返事をいただきました。

赤井さん作の原稿用紙「宮本輝用箋」を

お使いだそうですね。

原稿用紙を新しくされたのは

どのようななぎつかけからですか。

原稿用紙を目にされたときのご感想は、いかがでしたか。

数年前から、原稿を書いていて手が震えるようになります。10行分くらい書くと止むのですが、「これから仕事をするぞ」と思うとアドレナリンが出るんでしうね。そうすると、手も汚れます。もつと万年筆がすべってくれるインクの吸いがいい原稿用紙に替えようかと思つていたところ、赤井さんからいただいた手紙の便箋の紙質がとても良くて、この紙で原稿用紙を作りたいと相談しました。すると、知り合いがやつてゐる会社なので頼めるとのこと。「いつそのこと罫線も赤井さんが書いてください」とお願いしたところ、フリーハンドで線を引いてくれました。5千枚注文して、届いたときにはその量に驚きましたが、「これを全部使うぞ」と自らを奮い立てる意味もありました。

植樹祭の場面は、「和久傳の森」がモデルになつていてお聞きしました。

実際に森をご覧になられた際に感じたことを教えてください。

実際に行つたときはまだ少し育つただけの状態でした

が、これが1年経ち3年経ち10年経つにつけ、鳥や昆虫やさまざまな動物、豊かな森を見たいという人たちを集め、いすれは大地を守る森へと成長するのだと思うと感動しました。やっぱり自然というものがいかに人間を守つてくれているか、近年のいろいろな災害で思い知つた

と思うんです。和久傳の森の赤ちゃんを見ただけで、「森っていうものはすごいものだな」と感じましたね。

仁志が佐伯にお灸をすえながら会話するシーンで、それまでは厳しいイメージだった佐伯が

柔軟になつたのが印象的でした。

宮本さんもお灸をされると気持ちがほぐれますか。

疲れがひどくなると家族に連れていかれることがあります、お灸も鍼もマッサージも実はあまり好きではありません。甥が鍼灸師の学校に入り、練習台にされた

ことがあるので、すえ方や、いつ頃つまんで取るとかのやり方は知つていたんです。何でも役に立つんですよ。

落語の演目や五代目志ん生の話が登場しますが、宮本さんにとって落語の魅力とは何でしょうか。

僕にとって落語っていうのは、五代目志ん生だけなんです。やっぱり名人だと思いますよ。寝る前にiPodで五代目志ん生の落語を聞くときがあります。最初の一聲で「これは酔つてゐるな」「やる気がないな」というのがわかる。でも話にのつてきたときはやっぱりすごい。稽古をせずに高座にあがつたとか言つていますが、実は何度も稽古を重ねているんですね。五代目志ん生は60歳近くになつて売れ始めました。戦争で中国に行き、苦労をした人ですが、たゆまず努力を重ねた人です。作中では、「生まれつき名人だつたわけじゃない」という、ひとつ

ツツキッコのソースや仁志の得意料理であるビーフ・ポトフのモデルはありますか。

ビーフ・ポトフは僕の得意料理です。なので、作品に書いているのは僕の作り方です。ツツキッコのメニューは創作なので、真似して作つたらとんでもないことになります(笑)。

作中にはオメガやブレゲの時計が登場しますが、

宮本さんにとつて時計の魅力は何ですか。

あわせて、宮本さんのお気に入りの時計があれば教えてください。

やっぱり職人さんの世界なんですよ。それも長年修行

した時計職人さんがひとつずつ作つていくそのすごさ

です。そういう要素を入れるために作中でも職人さんを

入れています。お気に入りは今身につけていたバテック・

フィリップ・阪神淡路大震災で家が壊れて、やけくそ

ような気分でシルクロードの旅に行き、帰ってきたら旅に持つて行つた時計が壊れました。「どうせ家は建て直さ

ないといけないし、ついでに買ってしまえ」とこの時計も

買いました。買い物でストレスを発散させる女性の気持

ちが初めてわかりましたね。

作中には革細工、焼物など、手仕事の作品が

たくさん出でますが、宮本さんの愛用品があれば教えてください。

原稿用紙、万年筆、それから時計ですね。震災で良いものはすべて壊れてしましました。それ以来、形あるものにお金をかけるのは嫌になりました。

本作品は、若い人への期待がこめられているように感じました。

追手門学院大学の学生に、これから的人生へのエールとしてメッセージをいただけますか。

大学というところには二つの要素があると思います。一つは勉学、アカデミックな世界です。もう一つは学問的なことだけでなく人間に対するフレキシビリティ。

これが、4年間で得られると思うんです。中高生のときは規則がたくさんあって、してはいけないことだらけですよね。でも大学に入つたら犯罪以外は自由。それが何も与えられていないようだけど実はさまざまなフレ

キシブルなものを学生の中に培つていると思うんです。追手門の良さは、良くも悪くも能天気なフレキシビリティを持つた学生が多いところです。この能天気なフレキシビリティが、世の中でやたら役に立つんですよ。これが大学の力だと思うんです。だから僕は「もっと遊べ」って言いたいですね。

